

現代文問題集 第六冊

書かれていないことを、根拠から読む

発展・推論の確かさ

和会塾

本書で身につける力

書かれた根拠から結論を導き、その結論をどの強さで言えるかを見定めます。

- 一 **直接確かめられること** 本文や資料に、そのまま示された事実・発言・時刻・状態を取る。
- 二 **かなり確かに言えること** 複数の根拠が同じ方向を支え、強い反証がない結論を書く。
- 三 **複数の読み取り方が成り立つこと** 同じ行動を、異なる固有の根拠から説明できるとき、複数の読み取り方をその根拠とともに残す。
- 四 **本文だけでは決められないこと** 人物の内心、直接の原因、仮定後の結末など、決定資料のない一点を特定する。

- 五 **根拠を越えた想像** あり得そうでも本文が支えない内容は、答案の結論にしない。

慎重に読むとは、すべてを弱い語尾で書くことではありません。根拠がそろう箇所は明確に述べ、決定資料がない箇所だけを限定します。

章の進め方

- 一 本文・資料を読む 問いに関わる事実・発言・時刻・変化を、本文の言葉で確かめる。
- 二 準備メモを置く 根拠、そのつながり、結論の確かさ、なお決められない点を短い語句に整理する。
- 三 解答欄へ清書する 結論を先に置き、必要な根拠をつなぎ、指定字数の範囲でまとめる。
- 四 解答・解説で確かめる 語句の一致ではなく、根拠・関係・限定の置き方を三つの答案例と比べる。

推論の確かさ

直接確かめられる／かなり確かに言える／複数の読み取り方が成り立つ／本文だけでは決められない／根拠を越えた想像

前半では準備メモの項目を明示し、後半ほど支援を減らします。最終章では必要な要素を自分で配置します。

目次

第一章 一文から、どこまで言えるか	5頁	50～80字—短い記録から、確かめられること・強く言えること・まだ決まらないことを区別する
第二章 机の上に残ったもの	16頁	60～100字—同じ行動から成り立つ二つの読み取り方と、どちらにも共通することを区別する
第三章 起こらなかったこと	29頁	70～110字—発言されなかったことが場に及ぼした働きと、別の行動を取った場合の仮定を区別する
第四章 言いすぎた夜	42頁	80～120字—一人称の記憶・評価と、記録から確認できる出来事を区別する
第五章 書き換えられた一文	54頁	90～130字—草案・会議記録・最終文を照合し、改稿の方向と個人の内心を区別する
第六章 結論を選び、可能性を残す	66頁	100～150字—本文と二つの補助資料から、最も支持される結論・別の可能性・未確定点を統合する

各章は、本文・資料、設問、解答・解説の順に進みます。

第一章 一文から、どこまで言えるか

この章で身につける力 短い通知や記録を読み、書かれている事実を土台にしながら、結論をどこまで強く書けるかを見定める。

資料A～Gは、それぞれ独立した架空の記録です。

読み始める前に

各資料について、完成答案を書く前に〈文にあること〉〈そこから言えること〉〈まだ決まらないこと〉の三つに、短い語句を整理します。

- 一 文にあること 記録に実際に書かれた時刻・行動・数を取る。
- 二 そこから言えること 条件や数の関係を保つと強く言える内容を書く。
- 三 まだ決まらないこと 理由・意図・原因など、記録に足りない情報を特定する。

本文・資料

【資料A】 工作会の案内と申込記録【案内には「午後三時の時点で申込者が五名未満の場合は、翌週へ延期します」とある。申込記録には、一人目から四人目までの受付に続き、五人目を午後二時四十八分に受け付けたと記されている。午後三時の申込者数は五名。午後三時以後の開催記録はない。

【資料B】 連絡用のメッセージ【係の森田は、伊藤へ「明日の集合は九時です。変更を希望する場合は、今日の午後五時までに返信してください」と送った。画面には送信時刻だけがあり、午後五時までの返信は表示されていない。既読を示す印は、この画面にはない。

【資料C】 貸出用かさの記録【開室時の本数は八本。午前中に三本を貸し出し、二本の返却を受けた。正午五分の点検欄には「七本」と記されている。一本ずつを見分ける番号や、借りた人の氏名は記録されていない。

【資料D】 落とし物棚の観察【午後四時十分、青いファイルが棚の上段にあった。午後四時三十分、同じ場所にファイルはなかった。その間の受取記録は空欄であり、棚を整理した人についての記載もない。

【資料E】 合唱練習の記録【近藤は開始から終了まで練習に参加した。確認用の録音では、三番の合唱部分に近藤の声が入っているか判別できなかった。録音機は部屋の後方に一台だけ置かれ、参加者ごとの音声は分けて保存されていない。

【資料F】 搬入口の案内と受付記録【案内には「東口は午後六時に閉まります。六時以後の搬入は北口受付を利用してください」とある。受付記録には、午後六時七分、北口で荷物一個を受け取ったと記されている。到着が六時を過ぎた理由は書かれていない。

【資料G】 鉢植えの観察記録【午前九時、土の表面は乾き、葉は下向きだった。九時十分、水を二百ミリリットル与えた。正午、葉は朝より上向きになっていた。室温、日当たり、前日までの水やりについては記録がない。

設問

問一 確かめられることと残る点

資料Bと資料Cについて、直接確かめられることと、それぞれの資料だけでは決められないことを一つずつ挙げ、50〜60字で書きなさい。

準備メモ
〈文にある〉返信の表示／録音

〈まだ決まらない〉伊藤の受け取り方／近藤が実際に歌ったか

解答欄(50～60字)

[illegible]

点検 □根拠 □関係 □確かさ □残る点 直す語句・メモ..

問三 なくなった物について言えること

資料Dの青いファイルについて、記録から確かに言える変化と、持ち去った人について決められない点を、60〜70字で書きなさい。

準備メモ
〈文にある〉四時十分にはある／四時三十分にはない

〈不足〉移動した人と理由の記録

解答欄(60～70字)

[illegible]

点検 □根拠 □関係 □確かさ □残る点
直す語句・メモ..

資料Ⅶから北口が使われたことは強く言えるのに、資料Ⅵから水やりが葉の変化の原因だとは言い切れない。その理由を70〜80字で書きなさい。

〈資料⑤〉 前後の観察だけ／他の条件が未記録

[illegible]

点検 □根拠 □関係 □確かさ □残る点
直す語句・メモ..

解答・解説

本文・資料の流れ

資料A・C・F 条件、数、受付場所から、限定された結論を強く導ける。

資料B・D・H 返事や物や音声が確認できないことと、人物の行動・理由とは同じでない。

資料G 水やりの後に変化は見られるが、時間の順序だけでは原因を一つに決められない。

次頁から、問いが求める結論の確かさ、根拠のつながり、本文だけでは決められない点を一問ずつ確かめます。

問一 確かめられることと残る点 解答・解説

設問の意図 二つの資料で、記録の不在と行動の不在を混同せず、確定部分と未確定部分を一文にする。

根拠 資料Bの「返信は表示されていない」「既読を示す印はない」、資料Eの「参加した」「声が入っているか判別できなかった」。

根拠のつながり 画面や録音で確認できないことは、連絡を読んだか、実際に歌ったかを直接示すものではない。

言える範囲・決められない点 返信と音声を確認できないことまでは言えるが、伊藤の認識や近藤の行動は決められない。

答案の組み立て方 資料Bと資料Eを並べ、各々について〈確定したこと＋決められないこと〉を対応させる。

模範解答 伊藤の返信と近藤の声は記録上確認できないが、伊藤が連絡を見たか、近藤が歌わなかったかは決められない。(50字)

別解例① 返信の表示も録音中の近藤の声も確かめられない一方、伊藤が読んだか、近藤が実際に歌ったかまでは分からない。(52字)

別解例② 画面に返信はなく録音で近藤の声も判別できないが、二人が実際に見たか歌ったかは各資料だけでは定まらない。(51字)

☆自己採点の観点

- 資料Bと資料Eの確定部分を一つずつ書いたか。
- 記録がないことを、そのまま人物の行動の不在にしていなか。
- 何が決められないのかを具体的に示したか。

答案で注意したい点 「返信しなかったので反対している」「録音にないので歌わなかった」とすると、記録が示さない事情を補ってしまう。

問二 条件から強く言える範囲 解答・解説

設問の意図 条件と記録を結び、条件に関する強い結論と、記録のない開催結果を区別する。

根拠 資料Aでは、延期条件は「午後三時の時点で五名未満」であり、五人目は午後二時四十八分に受け付けられている。

根拠のつながり 締切前に五人がそろったため、人数不足という延期条件には当たらない。ただし開催記録はない。

言える範囲・決められない点 人数不足による延期ではないことは強く言えるが、別の事情も含め実際に開催されたかは決められない。

答案の組み立て方 前半で条件との関係を断定し、「ただし」で開催そのものの未確定さを残す。

模範解答 三時前に五人目を受け付けたため、人数不足による延期条件には当たらない。ただし、実際に開催されたかは記録から決められない。(60字)

別解例① 申込者は三時までに五人となり、案内にある延期の人数条件は満たさないが、工作会が実際に予定どおり開かれたかまでは確認できない。(62字)

別解例② 締切時点で少なくとも五人いたので、五名未満を理由とする延期ではない。しかし、その後の開催の有無は資料Aだけでは分からない。(61字)

☆自己採点の観点

- 午後三時より前に五人目が受け付けられたことを使ったか。
- 人数条件については、弱めすぎずに結論を書いたか。
- 条件に当たらないことと、実際の開催を区別したか。

答案で注意したい点 「五人集まったので必ず開催された」とすると、案内が定める一つの延期条件を、開催を保証する条件へ広げてしまう。

問三 なくなった物について言えること 解答・解説

設問の意図 物の位置の変化と、その変化を起こした人物・理由を区別する。

根拠 資料Dの二時点の観察と、「受取記録は空欄」「棚を整理した人の記載もない」。

根拠のつながり 同じ場所からなくなったことは確認できるが、受取人と整理者のどちらが動かしたかを選ぶ記録がない。

言える範囲・決められない点 ファイルが棚の上段からなくなったことは確定する。所有者が受け取ったか、別の人が移したかは未確定である。

答案の組み立て方 二時点の変化を先に示し、後半で人物と理由に必要な記録がないことを書く。

模範解答

青いファイルが二十分の間に棚の上段からなくなったことは確かだが、所有者が受け取ったのか、誰かが移したのかは決められない。(60字)

別解例①

四時十分にあったファイルが四時三十分には同じ場所にはないことは分かるが、持ち去った人や移動の理由までは記録されていない。(60字)

別解例②

ファイルの所在が実際に棚の上段から変わったことは確認できる。一方、受取記録も整理者の記載もなく、誰が動かしたかは定まらない。(62字)

☆自己採点の観点

- 二つの時刻を比べて、位置の変化を書いたか。
- 所有者が回収したと決めつけていないか。
- 不足している記録に触れたか。

答案で注意したい点 日常的には所有者が受け取ることも多いが、「よくあること」は、このファイルを誰が動かしたかの根拠にはならない。

問四 結論の強さが異なる理由 解答・解説

設問の意図 直接記録された場所と、時間順から推測する原因とで、結論の確かさが異なる理由を説明する。

根拠 資料Ⅱには「北口で受け取った」と明記される。資料Ⅰには水やりの前後の変化はあるが、室温などの条件がない。

根拠のつながり 場所は記録内容そのものだが、原因は前後関係だけから選ばなければならない、ほかの要因を除けない。

言える範囲・決められない点 資料Ⅰでも水やり後に葉が上向きになったことは言える。水だけが原因だという断定はできない。

答案の組み立て方 Ⅱ資料の根拠の種類を対比し、資料Ⅰに不足する条件を最後に示す。

模範解答 資料Ⅱは受付場所を北口と直接に記しているが、資料Ⅰは水やりの前後に葉が変化しただけで、室温や日当たりなど他の要因を資料の記録から除けないから。(71字)

別解例① 北口での受取は記録そのものから確認できる。一方、葉は水やり後に上向いたにすぎず、ほかの条件が記録されていないため、その原因を水だけには絞れない。(72字)

別解例② 資料Ⅱでは行動の場所が北口と明記されるのに対し、資料Ⅰでは変化の順序しか分かつ、室温など別の要因もあり得るので記録上は水だけを原因にできない。(72字)

☆自己採点の観点

- 資料Ⅱでは場所が直接記録されていることを示したか。
- 資料Ⅰでは、変化の前後と原因を区別したか。
- ほかの要因を除けない理由を具体的に書いたか。

答案で注意したい点 慎重にするため両方を「分からない」とするのではなく、資料Ⅱのように直接書かれたことは明確に言う。

第二章 机の上に残ったもの

この章で身につける力 人物の行動と物の置かれ方を根拠に、二つの読み取り方をそれぞれ成立させ、なお共通して言えることを見つける。

本文は学習のために書き下ろした物語です。段落番号は、設問で根拠を確かめやすくするために編集上付したもので、本文の一部ではありません。

読み始める前に

〈共通する根拠〉 〈見方アを支える記述〉 〈見方田を支える記述〉 の三つに整理し、同じ記述だけで二つの結論を作らないようにします。

- 一 共通する根拠 どちらの見方でも変わらない行動と物の扱いを取る。
- 二 見方ア 亜希が戻るつもりだと読める固有の記述を取る。
- 三 見方田 直へ判断を預けたと読める別の記述を取る。
- 四 反証を確認する 関心を失ったという見方と合わない行動を探す。

本文・資料

① 市民ギャラリーの作業室には、切り落とした紙がまだ床に散っていた。直はそれを靴の先で机の下へ寄せてから、もう片づけてよいのか迷った。小さな写真展示の公開は翌日の正午。入口の案内板に題名のカードを貼れば、二人の作業は終わる。

② 机には「まちの影をたどる」と「光の向こうへ」の二枚が並んでいた。直は後の方を推していた。入口から見たとき、短い題名ならすぐに目に入る。亜希は前の方を、廊下へ出る人から見える向きに回した。「最後の写真まで見たら、こっちはないかな」展示は、朝の川岸から始まり、建物の陰が道いっぱいに伸びた写真で終わっていた。

③ 亜希は一枚ずつ案内板へ置き、入口まで下がった。戻ると、細い金属の定規で右下の余白を測る。もう一枚に替え、また下がる。定規の端には小さな欠けがあった。直が以前それを借りようとすると、亜希は引き出しから別の定規を出してくれた。作業が途中で、その金属の定規だけは鞆の横の細いポケットへしまつて帰る。

④ 「五時、過ぎてる」

亜希が時計を見た。直も腕時計を見て、二枚目のカードを外しかけた手を止めた。

⑤ 「明日の朝は用事があるから、来られても十時すぎかな」

「公開まで二時間あるよ」

「うん」

亜希は椅子の背に掛けていた鞆を取り、二枚のカードを見比べた。直は印刷室に予備の台紙があったのを思い出し、取ってくると言った。

⑥ 戻ったとき、亜希は二枚に薄い保護紙を重ねていた。カードは少しずつずらされ、題名の初めの二文字が見えている。手を離すと下の一枚の端が浮いた。亜希は金属の定規を、二枚をまたぐ位置へ横たえた。

⑦ その横にはメモがあった。「先に来たら、遠くから見えて決めて。上にした方だけ貼って。もう一枚は捨てないで」。直が読んでいる間に、亜希はテープを引き出した。芯が透けるほど薄くなっているのを見て、戸棚から新しい一卷を取り、机の端に置いた。

⑧ 「じゃあ、明日。間に合わなかったら、進めておいて」

⑨ 扉へ向かった亜希は一度戻った。机の端まで夕日が伸びていた。ブラインドを半分下ろし、保護紙の角をそろえてから、今度は鞆を持ち直して出ていった。廊下でほかの作業室の人とあいさつをする声がした。いつも帰るときと同じ声だった。

⑩ 直は定規を持ち上げかけた。二枚の角が一緒に動いたので、元の位置へ置いた。欠けた端が、亜希の推していた題名の上に掛かっていた。そこを指でよけても、題名は保護紙の下だった。

⑪ 新しいテープの封を切ると、はがした細い帯が指に張り付いた。直はそれを丸めながら、何も貼っていない案内板を入口へ運んだ。二枚を交互に載せてみようととして、入口と机との間を一度、何も持たずに往復した。

⑫ 掃除を知らせる放送が入った。直は床の切れ端を拾い、使える大きさの紙を机の引き出しへ戻した。二枚のカードはまだ重なっていた。テープをメモの横へ寄せ、案内板だけを入口に立ててから、直は作業室の明かりを消した。

設問

問一 残された物とことば

亜希が帰る前、机の上に何をどのように残し、直へ何を任せたか。第六く第九段落を踏まえ、〇〇70字で書きなさい。

準備メモ
《物》二枚のカード・定規・テープ

〈ことば〉先に來たら決める／一枚は残す

解答欄(60~70字)

[illegible]

点検 □根拠 □関係 □確かさ □残る点 直す語句・メモ..

問二 成立しにくい解釈

亜希が案内板への関心を失い、作業を投げ出したという見方が本文と合いくいのなぜか。行動を二つ以上用い、70〜80字で書きなさい。

準備メモ
〈反証〉カードの保護／ブラインド／テープ／使わない一枚の保存

解答欄(70~80字)

[illegible]

点検 □根拠 □関係 □確かさ □残る点 直す語句・メモ..

解答・解説

本文・資料の流れ

第一～第三段落 異なる題名を推す二人の作業と、亜希が普段持ち帰る定規が描かれる。

第四～第九段落 翌朝の予定を話した後、亜希はカードと道具を整え、直が先に作業できる言葉を残す。

第十～第十二段落 直は机と入口を行き来するが、その夜には一枚を選ばない。定規を残した意図は語られない。

次頁から、問いが求める結論の確かさ、根拠のつながり、本文だけでは決められない点を一問ずつ確かめます。

問一 残された物とことば 解答・解説

設問の意図 後の解釈の土台となる物の配置と、明示された依頼を正確にまとめる。

根拠 第六段落の保護紙と定規、第七段落のメモと新しいテープ、第八段落の「進めておいて」。

根拠のつながり 物を保護し作業道具を置く行動と、先に来た人へ選択を認める言葉が一つの引継ぎを作る。

言える範囲・決められない点 亜希が残した物と頼んだ作業は確定できる。定規を残した最終的な意図までは、ここでは決めない。

答案の組み立て方 物の状態を先に示し、後半で直へ任せた判断と保存条件を書く。

模範解答

亜希は保護紙をかけた二枚のカードを定規で押さえ、新しいテープを置き、先に来た直へ、使う一枚を選んで貼り、他方を残すよう任せた。(63字)

別解例①

亜希は二枚のカードを保護紙と定規で押さえ、予備のテープを残し、先に来た直に、使う一枚を決めて貼り、他方は保存するよう頼んだ。(62字)

別解例②

亜希はカード二枚を保護して定規とテープを机に置き、直へ、使う一枚を選んで台紙に貼り、残る一枚も作業後に捨てずにおくよう任せた。(63字)

☆自己採点の観点

- 二枚のカードが保護されていたことを書いたか。
- 定規またはテープと、作業を続ける準備に触れたか。
- 直へ任せた内容を、意図の推測と区別して示したか。

答案で注意したい点 「亜希は直にすべて任せた」と広げると、使わない一枚を残すという条件や、翌日戻る可能性が抜ける。

問二 成立しにくい解釈 解答・解説

設問の意図 可能性を増やすだけでなく、本文の反証から成立しない解釈を退ける。

根拠 第六〜第九段落で、カードを保護し、テープを補い、日差しを避け、使わない一枚も残すよう頼む。

根拠のつながり 完成物と残る案の両方を守り、次の作業を可能にする行動は、関心を失って放置する態度と合わない。

言える範囲・決められない点 関心を失ったという見方は退けられるが、本人が戻るか直へ任せるかはなお二通り残る。

答案の組み立て方 具体的な行動を二つ以上並べ、それらが〈投げ出した〉という結論とどう矛盾するかを書く。

模範解答 亜希はカードを保護し、夕日を避けるためブラインドを下ろし、テープも補っている。使わない一枚の保存まで頼み、次の作業を整える行動は放棄とは合わない。(73字)

別解例① 二枚を保護紙と定規で守り、新しいテープを用意したうえ、残る案も捨てないよう伝えている。完成へ向けた準備が十分にそろい、関心を失ったとは読みにくい。(73字)

別解例② 亜希はカードの端をそろえ、日差しを防ぎ、作業を続ける道具を残している。どの案も作業後まできちんと保存する依頼があり、案内板を軽んじたとは言えない。(73字)

☆自己採点の観点

- 亜希の具体的な行動を二つ以上使ったか。
- 行動と〈関心を失った〉という見方の不一致を説明したか。
- 戻るという見方が任せるという見方を、ここで無理に一つへ決めていないか。

答案で注意したい点 声の調子だけで「怒っていない」と決めるより、物を守り作業を続けられるようにした複数の行動を使う。

問三 同じ行動から成り立つ二つの見方 解答・解説

設問の意図 一つの行動について、異なる本文記述に支えられた二つの解釈の筋道を並べる。

根拠 第三段落の定規を持ち帰る習慣と第八段落の別れの言葉、第六段落の浮いたカードを押さえる置き方と第七段落のメモ。

根拠のつながり 私物を残す例外性は再訪という見方を支え、実的な配置と依頼は引継ぎという見方を支える。

言える範囲・決められない点 どちらも本文に根拠がある。定規だけを見て、一方を唯一の意図と断定することはできない。

答案の組み立て方 「一方」を用いて二つの見方を対照し、それぞれに固有の根拠を一つ以上対応させる。

模範解答 普段は持ち帰る定規と「じゃあ、明日」から、亜希が翌朝戻って確認する印とも読める。一方、定規をカードの重しにし、先に選ぶよう頼んだメモから、直への引継ぎとも読める。(81字)

別解例① 普段は持ち帰る定規を残したことは、翌日また作業する意思を支える。一方、二枚を押さえる実的な置き方と、先に選んでよいというメモは、直に決定を預けた見方を支える。

(80字)

別解例② 大切な定規と「じゃあ、明日」は、亜希が翌朝戻る目印とも考えられる。他方、定規でカードを守り、先に一枚を貼ってよいと書いたことは、最終作業を直へ託す印とも読める。

(80字)

☆自己採点の観点

- 戻るという見方と、直へ任せるという見方の二つを示したか。
- 二つの見方を、異なる本文記述で支えたか。
- 定規の意味を亜希の唯一の意図として断定していないか。

答案で注意したい点 二つの結論を並べても、両方を「定規があるから」だけで支えると、異なる解釈の筋道にはならない。

問四 二つの見方と共通すること 解答・解説

設問の意図 二つの見方を支える根拠をそれぞれに対応させたうえで、その違いを越えて共通する結論をまとめる。

根拠 定規を普段は持ち帰ることと別れの言葉、選択を認めるメモと遅れる可能性、カード保護とテープの準備。

根拠のつながり 再訪と引継ぎは今後の担当について異なるが、いずれも案内板を完成へ進め、二案を粗末にしない行動である。

言える範囲・決められない点 二つの見方は両立しうる。亜希がどちらを主に意図したかは決まらないが、作業と両案を大切にすることは強く言える。

答案の組み立て方 一文目で二つが残る根拠を対比し、二文目で共通して言える行動の方向を示す。

模範解答

普段持ち帰る定規と翌日を示す言葉は再訪を支えるが、選択を任せるメモは引継ぎを支えるため、二つが残る。ただし、どちらでもカードと道具を整え、作業を途切れさせず両案を守ろうとした点は共通する。(94字)

別解例① 定規を残す例外的な行動からは戻る意思が、到着の遅れとメモからは直へ託す意思が読める。最終担当は決まらないが、カードを保護して道具を補い、案内板を進め、使わない案も保存する方向は確かである。(94字)

別解例② 「じゃあ、明日」と私物の定規は再び来る見方を、先に貼ってよいとの依頼は任せ見る見方を支える。どちらを取っても、カードを保護し道具を用意した亜希が、作業の継続と二案の保存を望んだことは強く言える。(96字)

☆自己採点の観点

- 二つの見方が成り立つ根拠を、それぞれ示したか。
- 誰が決めるつもりだったかを一つに固定していないか。
- 両方に共通する作業の継続とカードの保護を書いたか。

答案で注意したい点 「二つの見方があるので何も分からない」とせず、異なる点と、根拠から共通して言える点を明らかにする。

第三章 起こらなかったこと

この章で身につける力 起きた出来事と、起きなかった行動を区別し、不作為が場の流れへ与えた働きを読み取りながら、反対の行動を取った場合の結果は断定しない。

本文の団体・人物・番組はすべて架空です。段落番号は、設問で根拠を確かめるために編集上付したものです。

読み始める前に

〈実際に起きたこと〉 〈起きなかった行動〉 〈そこから強く言えること〉 〈決められないこと〉を区別して整理し、仮定を実際の結果に混ぜないようにします。

- 一 起きたこと 会議の発言、記録、編集後の結果を時点順に取る。
- 二 起きなかったこと 新井がしなかった発言と提示しなかった資料を特定する。
- 三 言えること 沈黙が実際の決定過程で果たした働きを書く。
- 四 決められないこと 沈黙の理由と、発言があった場合の結論を区別する。

本文・資料

① 録音室の予約札を裏返すと、瀬田は机に時計を置いた。地域の言葉を紹介する音声番組を、四人で作っていた。十二の短い朗読をつないで二十分以内にし、翌日の午後までに完成データを送る。瀬田が進行し、木田が音声編集する。朗読者の一人である新井は台本を持ち、久野は再生時間の記録を開いた。

② 通して聞き終えると、画面には二十分四十二秒と表示された。

③ 木田は編集画面を拡大した。十二の朗読の間には、それぞれ四秒の無音部分がある。「この十一箇所を詰めれば、四十四秒短くなります。本文は一つも削らずに済みます」久野は記録用紙の隅に計算を書き、「それなら入る」と言った。瀬田は翌朝の予約時刻を確かめた。録音室が使えるのは三十分だけだった。

④ 新井の手元には、前週の試聴メモがあった。二秒の間を置いた版と四秒の間を置いた版を、協力者二人に聞いてもらった記録だった。二秒版の欄には、話し手が替わったことに気づきにくかった二箇所に印がある。四秒版の欄には、二人とも十二の朗読を区別できたと書いてある。試した長さはその二種類だけだった。新井は紙の上端を台本にそろえ、一行目に指を置いた。

⑤ 「間を詰める案で、異論はありませんか」

瀬田が尋ねた。木田は編集画面を開いたまま、新井と久野を順に見た。

⑥ 誰も話さなかった。三秒ほどして廊下を台車が通り、久野が時計へ目を移した。

⑦ 新井は試聴メモを半分に折り、台本の下へ入れた。瀬田は「では、それで進めましょう」と言い、会議の記録へ「朗読間の四秒を削除。本文は全て残す」と入力した。木田は作業用のデータを複製した。久野が翌朝の集合時刻を読み上げ、新井も手帳を出した。メモのことを尋ねる人はいなかった。

⑧ その夜、木田から新しいデータが届いた。翌朝、四人で再生すると、十九分五十八秒で終わった。久野は時間の欄に丸を付けたあと、台本の三つ目の終わりへ戻った。「ここ、今どこを読んでいるのかと思った」。前の朗読の最後と次の題名の間がなく、ひと続きに聞こえたと言った。八つ目の前でも台本を一度めくり損ねていた。新井はその箇所から聞き直した。

⑨ 木田が次の題名を読む部分の音量を上げると、久野は台本を指でたどりながらも一度聞いた。瀬田は送付先の画面を開き、ファイル名を確認している。間の長さを変える話はず、十二の朗読はすべて残った。最後の確認欄には、十九分五十八秒と記された。

⑩ 数日後、届いた感想を瀬田が五枚印刷して持ってきた。「短く区切られていて聞きやすかった」と書かれた紙の次に、「話し手が替わったところを一度聞き逃した」と書かれた紙があった。木田は一枚ずつ読み、「時間には収まってよかった」と言った。久野は次回の記録を開いた。

⑪ 瀬田が、空いた行へ「間の長さを別に試す」と書き込んだ。

⑫ 新井は鞆から、折ったままの試聴メモを出した。「それ、前の試聴の？」と久野が聞いた。新井はうなずいて紙を広げ、机の上へ置いた。久野は二秒版の欄と四秒版の欄を見比べた。

⑬ 「これも一緒にしておこう」

新井が言った。会議の記録を入れた箱は、もうふたが閉じられていた。新井はそれを開け、日付の順を確かめてメモを挟んだ。折り目のついた端が持ち上がり、久野が上からそっと押さえた。

問三 別の行動を取った場合の境界

新井が会議で試聴メモを示していた場合について、本文から考えられることと、事実のようには言えないことを区別し、90〜100字で書きなさい。

準備メモ 〈考えられる〉別案を検討する機会

「言えない」四秒を維持／必ず聞きやすくなる

解答欄(90~100字)

[illegible]

点検 □根拠 □関係 □確かさ □残る点 直す語句・メモ…

不作為が残したもの

新井が発言しなかったことは場の流れへ何をもたらしたか。また、新井が発言しなかった理由について何が決められないか。本文全体を踏まえ、100～110字で書きなさい。

・即時編集・別の試し方は次回

資料への評価／時間への配慮など未確定

(100~110℃)

[illegible]

直す語句・メモ..

解答・解説

本文・資料の流れ

第一～第四段落 二十分の制限と短縮案が示される。新井は、間の長さと言き分けを比べた試験メモを持っている。

第五～第七段落 異論を尋ねられても発言はなく、試験結果が話し合われないまま短縮が決まる。

第八・第九段落 時間には収まるが、区切りを聞き取りにくい箇所があり、音量が調整される。
第十～第十三段落 異なる感想が届き、間の長さの検討は次回の記録に残る。試験メモは後から保存される。

次頁から、問いが求める結論の確かさ、根拠のつながり、本文だけでは決められない点を一問ずつ確かめます。

問一 実際に起きた変化 解答・解説

設問の意図 仮定を交えず、決定後に本文で確認できる利点と問題をまとめる。

根拠 第八・第九段落の十九分五十八秒、朗読を全て残したこと、久野が区切りを聞き取りにくく台本をめくり損ねたこと。

根拠のつながり 間を削ったことで時間は短くなったが、朗読どうしの境目も狭まり、切替えに問題が生じた。

言える範囲・決められない点 時間が収まり切替えの問題が起きたことは確定できる。公開後の全員が聞きにくかったとは言えない。

答案の組み立て方 時間と内容の結果を先に示し、「一方」で切替えの問題を対にする。

模範解答 再生時間は十九分五十八秒になり、十二の朗読も残った。一方、久野には前の朗読と次の題名がひと続きに聞こえ、別の区切りでも台本をめくり損ねる問題が生じた。(75字)

別解例① 十二の朗読を削らず二十分以内に収められたが、久野は朗読の切替わりを追いつけなくなった。前の朗読と次の題名が続いて聞こえ、八つ目の前でも台本をめくり損ねた。(76字)

別解例② 番組は全ての朗読を残したまま十九分五十八秒に短くなった。しかし、久野が前の朗読と次の題名をひと続きに聞き、別の箇所でも台本をめくり損ねる結果が生じた。(75字)

☆自己採点の観点

- 二十分以内に収まり、十二の朗読が残ったことを書いたか。
- 切替えて実際に起きた問題を一つ以上示したか。
- 公開後の全ての聞き手へ結果を広げていないか。

答案で注意したい点 「間を詰めたため番組は失敗した」と評価すると、時間内に収まり全朗読を残せた結果を落としてしまう。

問二 発言しなかったことの働き 解答・解説

設問の意図 不作為が意思決定へ与えた実際の働きを示しつつ、決定の全責任を一人へ集めない。
根拠 第四～第七段落で、新井が試聴メモを持ちながら発言せず、瀬田が短縮の決定を記録したこと。第三段落の期限と録音室の制約。

根拠のつながり 反対材料が会議に現れなかったため、提示された案は追加検討なく合意された形になり、作業へ移った。

言える範囲・決められない点 沈黙が決定を進めた働きは言えるが、案を出した木田、確認した瀬田、締切などほかの要因もある。

答案の組み立て方 新井の不作為と会議の進行を因果で結び、最後に決定が複数人の過程だったことを残す。

模範解答 新井がメモも異論も示さなかったため、間を詰める案は反対がないものとして記録され、すぐ編集へ移った。ただし、決定には木田の提案や瀬田の進行、迫る締切も関わっている。(81字)

別解例① 試聴結果が会議に出ず沈黙が続いたことで、木田の案は合意された形となり、その夜の作業へ進んだ。ただし、新井一人でなく、提案と進行や翌日の締切も決定に関わっている。(80字)

別解例② 新井の不発言は、別の検討材料を場に出さず、提案を異論のない決定として前へ進める働きをした。一方、木田の提案、瀬田の進行、迫る翌日の締切もその決定に関わっている。(80字)

☆自己採点の観点

- 試聴メモと異論が会議に出なかったことを書いたか。
- 反対のない決定として記録され、作業へ移った流れを示したか。
- 新井だけを決定の原因や責任者にしていないか。

答案で注意したい点 沈黙に働きがあっても、「新井が番組を聞きにくくした」と結果の全てを一人へ帰すことはできない。

問三 別の行動を取った場合の境界 解答・解説

設問の意図 起きなかった行動の可能な働きと、その後の結論を保証できない境界を示す。

根拠 第四段落の二秒版と四秒版の試聴結果と協力者数、第一・第三段落の期限と利用時間、第五・第七段落の決定過程。

根拠のつながり メモの提示は検討材料を増やすが、その資料だけで会議の選択や公開後の受け取られ方は決定しない。

言える範囲・決められない点 検討が開かれた可能性は言える。間の維持、別箇所削除、番組の改善を確定することはできない。

答案の組み立て方 前半で生じ得た検討を示し、「しかし」で保証されない結論を具体的に列挙する。

模範解答

メモが示されれば、間の長さや別の削り方を検討する機会は生まれたと考えられる。しかし、試聴者は二人だけで他の長さも試しておらず、四秒が必ず残り、切替えが改善したとは本文から断定できない。(92字)

別解例①

新井の発言により二秒版と四秒版の違いが議題になった可能性はあるが、試聴者は二人だけだった。会議が四秒を選んだか、別の部分を削ったか、同じ結論にしたか、その結果を変えたかも決められない。(92字)

別解例②

試聴結果の共有は、間を詰める案を見直し、別の削り方を検討する材料になり得た。ただし、協力者は二人で他の長さを試しておらず、発言すれば番組が最終的に必ず聞きやすくなったとは言えない。(90字)

☆自己採点の観点

- 発言が検討材料を増やす可能性を書いたか。
- 会議を選んだはずの結論を断定していないか。
- 試聴の規模や期限など、結果を決められない理由を示したか。

答案で注意したい点 起こらなかった行動を評価するときも、「発言していれば全て解決した」という筋書きを本文の外から作らない。

問四 不作為が残したものの 解答・解説

設問の意図 不作為の実際の作用と、行為者の内心について残る未確定点を一つの場合へ統合する。

根拠 第五～第九段落の沈黙・決定・編集、第十一～第十三段落の次回記録と後から保存されたメモ。沈黙の理由を述べる発言はない。

根拠のつながり 発言がないことで案は即時に進み、別の検討は後へ回る。ただし、外から見える沈黙だけでは理由の候補を選べない。

言える範囲・決められない点 場への働きは強く言える。新井の慎重さ、遠慮、時間への判断など、沈黙の内的な理由は決まらない。

答案の組み立て方 前半で決定過程への働きを述べ、後半で理由を選べない根拠と未確定な候補を示す。

模範解答

新井の沈黙により、間を詰める案は反対なしとして編集へ移り、別の長さを試すことは次回へ送られた。ただし、試験メモを持ちながら発言しなかった理由は語られず、二人の試験では不十分と考えたのか、締切を優先したのかは決められない。(110字)

別解例① 試験メモが示されなかったため、会議はその結果を検討せず短縮案を採用し、間の比較は後へ残った。ただし、新井が資料を弱いと思ったのか、進行を止めたくなかったのかは分からない。沈黙と紙を折る動作だけでは、理由を一つに選べない。(110字)

別解例② 発言がなかったことで短縮案は異論のない決定として作業へ進み、試験結果は後の検討材料になった。一方、新井は沈黙の理由を説明していない。二人だけの試験結果への迷いか、時間への配慮かを、発言しなかった行動だけでは決められない。(110字)

☆自己採点の観点

- 不作為が決定と作業を進めた働きを書いたか。
- 別の検討が次回へ送られたことに触れたか。
- 沈黙の理由を一つに断定せず、何が不足しているか示したか。

答案で注意したい点 不作為を行為として読むことと、発言しなかった人物の性格や責任を決めつけることは別である。

第四章 言いすぎた夜

この章で身につける力 語り手が覚えていること、後から意味づけたこと、記録で確かめられることを区別し、相手の反応について複数の読み取り方を根拠から示す。

本文の人物・催し・メッセージはすべて架空です。段落番号は、設問で根拠を確かめるために編集上付したものです。

読み始める前に

〈起きたと確認できること〉 〈語り手の考え〉 〈空について成り立つ見方〉 の三つに整理し、語り手の記憶を作品世界の全事実にしないようにします。

- 一 確認できること 送信記録、返信、時間、台本の変更を取る。
- 二 語り手の考え 「受け入れた」「責める調子ではない」などを、語り手の評価として整理する。
- 三 空について成り立つ見方 指摘を受け取ったという見方と、その範囲を区切ったという見方を別の根拠で支える。

四 順序の揺れ 語り手が確かめられない発言・動作を、断定の根拠にしない。

本文・資料

① あの夜、最初に「いつも」と言ったのか、それとも「今日の後半は」と言った後で言い直したのか、今では順序がはっきりしない。「いつも」の方だけが、大きな声で思い出される。机の傷や台本の色まで見えてくるのに、その前の一文は、思い返すたびに少し違う。

② 空と私は、町歩きの案内役をしている。翌週の催しへ向けた公開練習で、空の説明は予定の八分を越え、十二分近くになった。橋の名の由来、石の積み方、川幅が変わった理由。聞いていた人から質問が出ると、空は台本にないことも答えた。橋を離れる時刻が遅れ、最後の場所では、私が説明しながら皆を出口へ促した。

③ 片づけの後、私は橋を渡った後の三分間に丸を付けた。用語の説明の後に似た例が続いている。空は隣の椅子を引き、私の印をのぞき込んだ。「ここ、長かった？」

④ 「空は、いつも説明を足しすぎる。聞く人が入る余地がなくなる」

⑤ 私はそう答えた、と覚えている。空は台本を閉じなかった。「そう聞こえたんだね」と言い、丸の内側を開いた。それから、「どれを残すなら、まだ聞ける？」と尋ねた。赤い線で囲んだところだけが、二人の間で平らになっていた。

⑥ 「全部だよ。例も定義も、あれじゃ歩く人が置いていかれる」
この言葉は、たぶん言った。空が「全部、ね」と繰り返した声を覚えているからだ。空は三本の線を引いた。橋の名の由来を書いた例には、線を引かなかった。私は先に部屋を出た。廊下から一度振り返ったが、机の上は扉に隠れて見えなかった。

⑦ 帰宅して台本を広げると、丸の外にも空の担当箇所があった。そこには、私は何も書いていなかった。午後九時十八分、空へメッセージを送った。「今日は言い方が強かった。伝えたかったのは、橋を出てからの三分のことです」。画面のその文と送信時刻は、今も残っている。

⑧ 翌朝、返信が来た。「三分は見直した。由来の例は一つ残す。集合時刻は同じで大丈夫」。私は出かける前に読んで、台本を鞆に入れた。

⑨ 二日後の練習は八分二十秒だった。用語の説明は短くなり、似た例は二つなくなっていた。私は自分の時計の数字を見て、空が指摘を受け入れてくれたのだと思った。あの夜、言ってよかったという気持ちまで湧いた。

⑩ 橋の名の由来は、残っていた。空はその例に入ると、参加者役の二人を橋のたもとへ招いた。以前の台本を手にした私は、削られていない行を指で追った。丸を付けたときにも、その行があった。私はあの夜、どの例のことを考えて「全部」と言ったのだったか。

⑪ 「この順で、途中で場所を見失わなかった？」
空が二人に聞いた。一人は分かりやすかったと答え、もう一人は由来の先も聞きたいと言った。空は両方をメモし、次の担当者へ合図をした。

⑫ 練習の後、空は台本を鞆へ入れながら、「この前の言葉、全部じゃなくて三分だったんだね」と言った。責める調子ではなかった、と思う。私は台本をしまう手を止めた。

⑬ 「うん。広げすぎた」

⑭ 空は一度うなずいた。少なくとも、私はそう覚えている。ただ、その後には催し当日の集合時刻も確かめ合った。うなずいたのが私の返事のすぐ後だったか、時刻の確認に答えるときだったかは、今は曖昧になっている。

⑮ 本番用の台本が届いたのは、その日の夜だった。私は古い方と重ね、丸を付けた頁を開いた。線を引かれなかった由来の例が、違う位置に載っていた。新しい方には、橋のたもとで足を止める印も付いている。空に返すために書き始めた「短くなってよかった」の後で、私はいったん手を止めた。

解答・解説

本文・資料の流れ

第一～第六段落 語り手は発言を回想するが、言葉の順序には自信がない。空は指摘の範囲を尋ね、台本の一部に線を引く。

第七・第八段落 送受信の文面には、語り手の訂正と、空が三分を見直して一例を残すという返答がある。

第九～第十一段落 語り手は短縮を指摘の受容と考える。一方、残された例と参加者への問いかけから、空自身の判断も見える。

第十二～第十五段落 範囲を確かめる言葉、曖昧なうなずきの記憶、新しい台本が続く。空の内心は語られない。

次頁から、問いが求める結論の確かさ、根拠のつながり、本文だけでは決められない点を一問ずつ確かめます。

問一 記録と語り手の評価 解答・解説

設問の意図 外部の記録と観察できる変更を、一人称の意味づけから区別する。

根拠 第七・第八段落の送受信文面、第九〜第十一段落の短縮と例の保持。第九段落の「指摘を受け入れてくれたのだと思った」は語り手の評価。

根拠のつながり 短縮と選択は確認できるが、それを指摘への全面的な同意と呼ぶのは語り手の解釈である。

言える範囲・決められない点 何が変わったかは確定できる。空がどの感情や理由で変えたかは決められない。

答案の組み立て方 確認できる出来事を二つ以上示し、「一方」を用いて語り手の評価と対照する。

模範解答 語り手が範囲を三分と伝え、空がそこを短くして一例を残し、説明が八分二十秒になったことは記録と行動から確かめられる。一方、指摘を受け入れたというのは語り手の評価である。(83字)

別解例① 送受信の文面、三分間の整理、一つの例の保持、短縮後の時間は本文から確かめられる。一方、それらを空による指摘の受容と捉え、言ってよかったと考えたのは語り手自身である。(82字)

別解例② 空が指摘箇所を改めつつ由来の例を残し、時間を八分二十秒にしたのは本文上の事実である。しかし、空が自分の批評を認めたという判断は、語り手がその行動へ加えた解釈である。(82字)

☆自己採点の観点

- 送受信記録または改稿後の具体的な変化を使ったか。
- 確認できる行動と、語り手の「受け入れた」という評価を区別したか。
- 空の納得や感情を事実として書いていないか。

答案で注意したい点 台本が変わったことから、空が語り手の人物評価まで受け入れたと広げることができない。

問二 言葉の範囲が変えるもの 解答・解説

設問の意図 一語によって批評の対象範囲が、局所の文章から人物の傾向へ広がる違いを示す。

根拠 第一・第三〽第七段落で、丸の範囲は三分間だが、「いつも」「全部」と広げた発言が回想され、夜に範囲を訂正している。

根拠のつながり 「いつも」は今回の台本を越えて空の習慣や人柄まで評価する形になり、「今日の後半」は検討可能な箇所へ限定する。

言える範囲・決められない点 言い方による範囲の差は強く言える。空が実際にどれほど傷ついたかまでは決められない。

答案の組み立て方 二つの表現が指す範囲を対比し、広い方が相手全体への評価として届き得ることを書く。

模範解答 「いつも」なら今回の三分を越え、空の普段の説明や人の傾向まで批判する言葉になるが、「今日の後半は」なら特定の台本箇所に限られる。そのため、同じ批評でも対象と相手が受け取る重さが変わるから。(94字)

別解例① 実際の問題は丸を付けた三分間なのに、「いつも」は空全体への評価へ広がる。一方、「今日の後半」と言えば批評は今回の文章に限定され、人格への否定として伝わりにくく、検討する対象も明確になるから。(95字)

別解例② 「今日の後半」は直す箇所を三分間へ絞るが、「いつも」は空の説明の仕方を恒常的な欠点として扱う。そのため、同じ批評でも対象の広さ、今回修正できる範囲、発言を具体的に受け取る重さが変わるから。(94字)

☆自己採点の観点

- 「いつも」と「今日の後半」が指す範囲を対比したか。
- 実際に検討していたのは三分間だったことを使ったか。
- 空が傷ついたと断定せず、伝わり方の違いとして書いたか。

答案で注意したい点 「いつも」は強い語だから悪い、とだけせず、批評の対象がどこからどこへ広がるかを説明する。

問三 空の応答について成り立つ見方 解答・解説

設問の意図 複数の読み取り方から一つを選び、その見方に固有の根拠どうしをつなげる。

根拠 受容と捉える見方は第九段落の短縮と第十一段落の参加者への確認、判断の範囲を保ったと捉える見方は第十段落の一例の保持と第十二段落の発言。

根拠のつながり 同じ選択的な改稿でも、有用な指摘の受容にも、自分の判断を保って批評の範囲を区切る応答にもなる。

言える範囲・決められない点 異なる見方でも、根拠と説明が整えば満点になり得る。同じ記述が別の解釈にも役立つ場合は、選んだ解釈とのつながりを明確にする。

答案の組み立て方 冒頭で見方を示し、二つの行動・発言を、その解釈へ向かう関係としてまとめる。

模範解答 空は指摘の有用な部分を受け取ったと読める。語り手が示した三分間を実際に短くし、次の練習では聞き手へ順序の分かりやすさを尋ね、さらに二人の異なる反応を実際にともに記録して説明を確かめようとしたからである。(101字)

別解例① 空は語り手の評価に境界を引いたと読める。「全部」ではなく実際に一つの例を自分で残し、後にも「全部じゃなくて三分だったんだね」と範囲を確かめたうえ、さらに二人の聞き手の異なる反応も両方記録したからである。(101字)

別解例② 空は批評を命令でなく材料として扱ったと読める。丸の付いた部分は整理する一方、由来の例は残し、語り手の「全部」には従わず、その後も参加者二人の異なる反応とともに記録して、自分で次の判断を続けたからである。(101字)

☆自己採点の観点

- 空の行動について一つの見方を明示したか。
- 選んだ見方を支える別々の根拠を二つ使ったか。
- 空の内心を断定せず、「〴〵と読める」と根拠の範囲を保ったか。

答案で注意したい点 改稿した事実だけを根拠に「全面的に納得した」としたり、一例を残しただけで「反発した」としたりしない。

問四 解釈を選び、決められない点を残す 解答・解説

設問の意図 選んだ解釈を根拠から述べ、本文だけでは決められない一点を明示する。

根拠 第七〜第十二段落の返信、選択的な改稿、参加者への確認、範囲を確かめる発言。第十四段落のうなずきの時点は曖昧である。

根拠のつながり 改稿と応答から関わり方は読めるが、内心や理由を一つに絞る発言はない。

言える範囲・決められない点 空の応答は解釈できるが、そのときの感情や改稿の主な理由は決まらない。

答案の組み立て方 解釈と二つの根拠をつなぎ、最後に決められない一点を具体的に書く。

模範解答

空は語り手の指摘を使える範囲で受け取り、自分の判断を保ったと読める。三分を短くしつつ一例を残し、聞き手にも順序を確かめ、異なる反応を両方記録したからである。ただし、指摘を受けたとき空がどのような感情を抱いたかまでは、本文だけで決められない。(120字)

別解例①

空は、広すぎる評価には範囲を確かめながら、台本への批評は材料にしたと読める。「全部じゃなくて三分」と確認し、一例を残して他を削り、聞き手の反応も記録したからだ。

ただし、改稿の際、時間の調整と語り手の指摘のどちらを重く見たかは確定できない。(119字)

別解例②

空の応答は、語り手の言葉をそのまま採らず、自分で検討し直すものだったと読める。由来の例を残し、二人の異なる反応を記録して、後にも「全部」の範囲を確かめたからだ。ただし、うなずいた時点も曖昧なため、語り手への納得の程度は本文から決められない。(120字)

☆自己採点の観点

- 空の応答について一つの解釈を選んだか。
- 異なる二つの根拠を、選んだ解釈へ結びつけたか。
- 未確定な点を、空の感情または改稿理由として具体的に残したか。

答案で注意したい点 未確定な一点を残しても、根拠が支える結論まで弱める必要はない。

第五章 書き換えられた一文

この章で身につける力 複数の時点の資料を比べ、何が削られ、何が具体化されたかから編集の方向を読み取る一方、書き手一人の意図までは断定しない。

この章の「みちくさ編集室」、人物、地図、調査票、会議記録は、すべて学習のために作成した架空のものです。

読み始める前に

〈変わった表現〉 〈記録にある理由〉 〈そこから言えること〉 〈決められないこと〉を時点順に置き、削除された語から本音を直接当てないようにします。

- 一 変化を取る 草案から消えた語と、最終文に加わった具体的な情報を対応させる。
- 二 記録へ戻る 各変化と結びつく会議の論点を一つずつ示す。
- 三 方向を読む 複数の変更に共通する編集上の方針をまとめる。
- 四 境界を残す 発言者、草案の書き手、個人が重く見た理由を資料の外へ置く。

本文・資料

町歩き用の音声案内を作る「みちくさ編集室」の保存ファイルから、坂道を紹介する一節に関する三資料を掲載する。草案と最終文の名義はいずれも編集室で、執筆担当者の欄はない。会議について残っているのは資料二の要旨で、録音や発言順の記録は添付されていない。

【資料一 案内文の草案／六月三日】

この坂は、かつて町で最もにぎやかな道だった。店が減った今も、夕方には昔の面影が残る。失われたにぎわいを想像しながら、ゆっくり歩いてほしい。

【資料二 編集会議の記録／六月五日】

出席四名。以下は、話し合った内容を論点ごとに整理した要旨。発言者名は付していない。

一 「最もにぎやか」の根拠を確認した。手元にあるのは十八年前と十年前の案内図、今年五月の調査票。ほかの通りと人出を比べた資料はなかった。

二 案内図と調査票は、調べた区域も掲載する店の基準も異なる。総数の増減は案内文に使わず、共通する店名を照合する。十八年前の案内図と今年の調査票には九店が共通していた。

三 夕方の下見では、配達の自転車のベル、買い物客の声、閉店準備の音を録音した。「失われたにぎわい」で結ぶと、現在の道も静まり返っているように聞こえないか。今ある暮らしの音を案内に入れる。

四 「昔の面影」に当たるものを現地で挙げた。看板と庇には、形を変えながら使われてきたものがある。歩く人が立ち止まって見られるものを示す。

五 過去をたどる案内にはするが、現在を昔の名残だけにしない。古い資料とのつながりと、歩いている今の道の両方に目を向けられる結びにする。

【資料三 案内文の最終文／六月八日】

十八年前の案内図と現在の調査票の両方に、九つの店名が見つかる。店先の看板や庇には、形を変えながら使われてきたものもある。夕方には、配達 of 自転車のベル、買い物客の声、閉店準備の音が重なる。過去とのつながりを探しながら、いま聞こえる音にも耳を向けて歩いてみよう。

解答・解説

本文・資料の流れ

資料一 過去のにぎわいを中心に、比較・減少・喪失を含む草案が示される。

資料二 比較資料の不足、調査範囲の違い、現在の音、具体化、過去と現在の両立が話される。

資料三 確認できる店名・物・音を示し、過去と現在の双方へ注意を向ける文に変わる。

冒頭の資料説明 文書の名義と記録の残り方が分かる。個々の発案や納得の過程を割り当てる記録はない。

次頁から、問いが求める結論の確かさ、根拠のつながり、本文だけでは決められない点を一問ずつ確かめます。

問一 草案から最終文への変化 解答・解説

設問の意図 語句の差だけでなく、比較・評価中心の草案から、確認可能な過去と現在の記述へ移る方向を示す。

根拠 資料一の三表現と、資料三の九つの店名、看板・庇、現在の音、結びの文。

根拠のつながり 根拠の乏しい比較と喪失の評価を外し、資料・観察に対応する具体情報を過去と現在の双方へ置く。

言える範囲・決められない点 文章の示し方の変化は確定できる。その変更を誰が主導したかは、この問題の資料から決めない。

答案の組み立て方 前半に削られた見方、後半に加えられた具体情報と新しい結びを置く。

模範解答 草案の「最もにぎやか」「店が減った」「失われた」という比較と喪失中心の表現を削り、資料で確認できる九店や看板・庇、現在の町の生活音を示して、過去と今の両方へ注意を向ける文に変わった。(91字)

別解例① 草案の未確認な順位や減少、失われたにぎわいという評価がなくなり、二資料で確認できる共通の九店、今も残る看板や庇、夕方の具体的な生活音をそれぞれ示し、過去と現在の双方を見る形になった。(91字)

別解例② 過去を最もにぎやかな時代、現在を喪失後と捉える書き方から、資料で確認できる九店や看板・庇、現在の具体的な生活音を並べ、二つの時点のつながりと今の様子をともに探す書き方へ改められた。(90字)

☆自己採点の観点

- 草案から削られた比較・減少・喪失の表現に触れたか。
- 最終文へ加わった具体的な情報を二つ以上使ったか。
- 過去だけでなく、現在の示し方の変化も書いたか。

答案で注意したい点 語句を列挙するだけでなく、過去を中心とする評価から、過去と現在を具体的に示す方向への変化をまとめる。

問二 会議記録が最終文へ現れた箇所 解答・解説

設問の意図 一つの変更理由へまとめず、事実確認と読み手への方向づけという異なる論点を最終表現へ対応させる。

根拠 資料二の論点一〇・三・五と、資料三の冒頭、現在の音、結び。

根拠のつながり 比較可能な資料の不足には共通項を示す方法で応じ、喪失へ限定する問題には現在の活動を併記する方法で応じる。

言える範囲・決められない点 論点と表現の対応は読める。各変更を発案した人物や、その人が抱いた感情は分からない。

答案の組み立て方 二種類の論点を「一方」を用いて対照し、それぞれに最終文の具体的表現を対応させる。

模範解答 比較資料が足りない点には、「最も」や店の総数を避け、二資料に共通する九店を示して具体的に応じた。一方、喪失だけへ導かないという論点には、現在の生活音を加え、過去と今の双方を見る結びへ変えることで応じた。(101字)

別解例① 資料の範囲が違うため順位や減少を断定せず、確認できる九店を書いた。また、現在を不足として見せないという論点は、夕方に今も聞こえる三種類の音を加え、「いま」にも耳を向ける呼びかけへ変えることで反映された。(101字)

別解例② 「最も」と店の減少を外し、案内図と調査票がともに示す九店へ絞ったのが事実確認への対応である。さらに、現在の音を三つ具体化し、過去とのつながりと今の双方へ注意を向けさせたのが、喪失に固定しない対応である。(101字)

☆自己採点の観点

- 資料不足への対応を、共通する九店と結びつけたか。
- 読み手の見方への配慮を、現在の音や結びと結びつけたか。
- 二つの論点を同じ理由へまとめていないか。

答案で注意したい点 すべてを「事実を正確にするため」とすると、現在を喪失だけで見せないという別の編集上の論点が消える。

問三 編集の方向と個人の意図 解答・解説

設問の意図 共同で採用された文書の方向と、記録されていない個人の内心・役割を区別する。

根拠 会議の五論点と最終文の対応。冒頭の資料説明と資料二の注記には、執筆担当者欄、録音、発言順、発言者名がないことが示される。

根拠のつながり 複数の論点が最終文へ一貫して反映されるため編集方向は読めるが、匿名の要旨から個人へ割り当てることはできない。

言える範囲・決められない点 資料に基づく表現と過去・現在の両立は強く言える。誰が納得・反対・主導したかは未確定である。

答案の組み立て方 先に編集室の方向を二点示し、「ただし」で個人について欠ける記録を具体化する。

模範解答 編集室は、確かめられない比較を避け、資料と観察に合う情報を示し、過去と現在の双方へ注意を向ける方針を選んだと言える。ただし、資料には執筆担当者や発言者の名前がなく、草案の書き手が納得したのか、参加者の誰が修正を主導したのかは決められない。(118字)

別解例① 会議の論点と最終文が対応するため、根拠の範囲を守り、昔のにぎわいだけでなく今の営みも示す方針は読み取れる。一方、記録は発言者名のない要旨で、草案と最終文の執筆者も示されていないので、各人の賛否や重く見た理由、担当した修正は特定できない。(118字)

別解例② 確認できる店名や現在の音を加え、比較や減少の断定を外した点から、事実を確かめて過去と今とともに示す方向が採用されたと言える。ただし、残るのは匿名の要旨で、担当者や発言順の記録もないため、誰が考えを改め、どの理由に納得したかは分からない。(118字)

☆自己採点の観点

- 編集室の方向を、根拠の範囲と読者の見方の両面から示したか。
- 個人について決められない内容を具体的に挙げたか。
- 匿名の記録を、全員の内心が一致した証拠にしていないか。

答案で注意したい点 最終文が会議記録に沿うことは組織としての採用を示すが、各人が最初から同じ
考えだったことまでは示さない。

問四 改稿から読めることの範囲 解答・解説

設問の意図 三資料を照合し、改稿の方向と、個人へ帰属できない理由を一答案へまとめる。

根拠 削除された三表現、会議の五論点、最終文の具体化、発言者のない記録。

根拠のつながり 変更は複数の論点と対応して文書の方角を示すが、誰がどれを重視したかは分らない。

言える範囲・決められない点 編集の方角は言えるが、削除者の本音、書き手の賛否、主導者は決まらない。

答案の組み立て方 前半で改稿の方角、後半で匿名性と複数理由による限界を書く。

模範解答

草案は、確認できない順位や減少、喪失中心の評価を外し、共通する店名や現在の音を示して、過去と今の双方へ注意を向ける文へ改められた。この方角は会議記録と対応するが、発言者と執筆者が不明で、一つの変更に複数の論点が含まうため、個人の意図は断定できない。(123字)

別解例①

改稿では、「最も」や「失われた」を削り、資料で確かめられる物と今の生活音を加えて、読者の見方を一方向へ決めない形にした。これは五つの論点に沿うが、会議記録は匿名で草案の担当者も示さず、一つの変更に複数の理由が含まうため、誰が何を重く見たかは分からない。(125字)

別解例②

最終文は、比較や減少を言い切る草案から、二資料に共通する店名、残る物、現在の音を並べる案内へ変わったため、根拠と複数の見方を重んじる方角が読める。ただし会議は発言者を記さず、草案の書き手も不明なので、その方角を特定の人の本心として断定はできない。(123字)

☆自己採点の観点

- 削除と追加から、改稿の方角を示したか。
- 会議の論点と最終文を二点以上対応させたか。
- 匿名記録から個人の意図を断定していないか。

答案で注意したい点 共同で採用した方角は言えるが、特定人物の本心にはできない。

第六章 結論を選び、可能性を残す

この章で身につける力 本文と時点の異なる二資料を照合し、最も支持される結論を選びながら、別の解釈が成り立つ条件と最後まで決められない一点を残す。

本文の展示会、団体、人物、写真、説明カード、作業記録、メッセージは、すべて学習のために作成した架空のものです。

読み始める前に

自由メモを用います。欄内で〈根拠〉〈結論〉〈残る点〉を自分で配置し、前の設問の答えをそのまま連結せず、問ごとに必要な要素を選び直します。

根拠 本文と資料一・二の時刻、発言、保存状態を必要な分だけ取る。

結論 最も支持される考えと、独立した根拠を持つ別の可能性を区別する。

残る点 伊織の最終判断や、閉場時の直接の理由など、決定資料のない一点を残す。

本文・資料

① 写真展示「川辺の一日」の最終日、私は説明カードの隅を押さえ直した。古い橋の影と、草の生えた空地を写した写真の前だった。資料で確かめた共同倉庫のあった時期と、朝に荷車が集まった記録を、百二十字ほどにまとめてある。書いては削り、空地の位置を取り違えないように文を直した。カードを読み終えた人が写真へ顔を上げるたび、その視線を追ってしまった。

② 伊織が、隣に立った。「カードを先に読んで、倉庫の跡を探す人が多いね」。しばらく写真を見てから、説明があると目を向ける場所も一つに寄るのではないかと言った。

③ 「最後の一時間だけ、カードを伏せてみない？ 先に写真を見た人が、どこへ目を向けるか知りたい」

④ 私は受付で足りなくなった資材を取りに行くところだった。午後四時半には戻るから、そのときに元へ戻すか一緒に決めよう、と答えた。カードと予備の印刷を捨てないよう頼むと、伊織は展示台の下のファイルを指で示した。入口へ向かう途中で、念のため同じことをメッセージにも残した。

⑤ 用事は長引いた。戻ったのは、閉場から五分後だった。

⑥ 照明の半分が消えた会場では、拓が折り畳んだ椅子を重ねていた。伊織は鍵を返しに行ったという。写真の前へ行くと、説明カードは文字の面を下にし、透明な重しの下へ置かれていた。裏の隅に、鉛筆で「16:00～」と書いてある。

⑦ 最後まで伏せておくほど、説明は邪魔だったのだろうか。私は重しを持ち上げた。折れも汚れもない。カードの角を少しめくると、何度も直した最初の一文が現れた。展示台の下ファイルには、同じ文の予備が一枚入っていた。印刷したときに付いた端の薄い線まで同じだった。

⑧ 「四時半を過ぎても人が続いてね。戻す時機を逃したみたい」
拓が椅子から手を離して言った。私は、伊織がそう言ったのかと聞いた。

⑨ 「いや、その話は聞いてない。僕は入口にいたから。途中で戻せていないのは見たけど、最後にどうするつもりだったかまでは」

拓は机の上の記録を渡した。スマートフォンを開いても、伊織からの新しい連絡はなかった。
⑩ 来場者のメモが三枚、時刻順に並んでいた。最初の人は橋の影の形を小さく描き、次の人は草の向きについて書いていた。三枚目には「空地の向こう側へ出てみたい」とあった。私は写真へ顔を上げた。倉庫のあった場所の奥にも、道らしい細い線が見えた。

⑪ 机の記録には二人の筆跡があった。私は、拓の書いた四時三十二分の行を読んだ。その下の伊織の字は、カードの裏と同じ鉛筆だった。

⑫ 拓が最後の椅子を運びに行った。私は透明な重しをカードの上へ戻した。翌日は展示物を箱に収めるため、伊織も来るようになっていた。「明日、カードとメモも並べて見たい。何時ごろ来られる？」と送って、三枚が風で動かないように記録用紙を隣へ置いた。

【資料一 当日の作業記録】

15:55 伊織 説明カードと写真の位置を確認。

16:00 伊織 説明カードを伏せる。写真その他は変更なし。

16:32 拓 来場者が続いているため、カードの復旧を延期。

16:48 伊織 来場者メモ三枚を転記。カードは伏せたまま重しの下へ保管。

17:00 拓 閉場。

【資料二 当日午後のメッセージ】

15:42 伊織 「最後の一時間、カードを伏せて見方の変化を見たい。戻す前に一緒に決めたい」

15:46 私 「16:30には戻る。説明カードは捨てずに置いておいて」

15:47 伊織 「了解。予備もファイルに残します」

解答・解説

本文・資料の流れ

第一〜第四段落 説明カードに手間を掛けた語り手に、伊織が一時的な配置の変更を提案する。戻った後に相談する約束を交わす。

第五〜第九段落 閉場後、語り手は伏せられたカードを見る。保存状態、拓の見聞きした範囲、連絡の有無が示される。

第十〜第十二段落 語り手は来場者のメモと記録を読み、翌日、伊織とカードを並べて見るために連絡する。

資料一・二 実施と延期の記録、事前の約束を照合できる。閉場時の伊織自身の理由を記した発言はない。

次頁から、問いが求める結論の確かさ、根拠のつながり、本文だけでは決められない点を一問ずつ確かめます。

問一 カードの状態を時点順に確かめる 解答・解説

設問の意図 解釈に入る前に、三つの情報源から確認できる時系列に必要な範囲へまとめる。

根拠 本文第三〜第七段落、資料一の15:55〜17:00、資料二の相談と保存の依頼。

根拠のつながり 事前の相談、実施、延期、保管、閉場を順につなぐことで、可逆的な扱いだった土台が見える。

言える範囲・決められない点 カードの扱いと時刻は確定できる。各時点で伊織が何を感じたかは含めない。

答案の組み立て方 提案・実施・閉場時の状態の三段階へ絞り、保存と予備を最後に入れる。

模範解答

伊織は最後の一時間だけカードを伏せる案を相談し、午後四時に実施した。午後四時三十二分に来場者が続いたため復旧は延期され、五時の閉場時にはカードは重しの下で保護され、同じ説明文の予備もファイルに残っていた。(102字)

別解例①

二人はカードを一時的に伏せ、戻す前に相談すると決めた。午後四時に伏せられ、四時三十二分には来場者が続いたため復旧延期と記録された。閉場時もカードは重しの下で保護され、同じ文の予備がファイルに残っていた。(100字)

別解例②

説明カードは、見方の変化を試すため最後の一時間だけ伏せる予定となり、午後四時に裏返された。来場者が続いて復旧は遅れ、作業記録では五時の閉場時にも保護されたまま残り、同じ説明文の予備も捨てず保管された。(100字)

☆自己採点の観点

- 相談、実施、復旧延期、閉場時の状態を時点順にしたか。
- カードが保護され、予備も残ったことを書いたか。
- 伊織の感情や最終意図を混ぜていないか。

答案で注意したい点 時系列を答える問題では、「説明を嫌った」「判断を待った」といった解釈を、確認済みの出来事として先に入れない。

問二 支持されにくい解釈を退ける 解答・解説

設問の意図 最も支持される結論を作るだけでなく、本文と合わない解釈を複数の反証から退ける。

根拠 一時的な実験の提案、共同判断の約束、カードと予備の保存、作業記録の「復旧を延期」。
根拠のつながり 時間を限定し、再利用できる形で保存し、復旧を前提にしている行動は、永久の排除と両立しにくい。

言える範囲・決められない点 永久に外すという解釈は支持されにくい。最終的にどの配置を選びたかったかまでは、反証だけから決められない。

答案の組み立て方 反証を三つ選び、それらが〈否定して永久に外す〉という解釈とどこで食い違うかを書く。

模範解答

伊織の提案は最後の一時間に限られ、戻す前に二人で決める約束もあった。さらに、カードを重しの下へ傷めず保管し、同じ文の予備も残し、作業記録でも「復旧を延期」としてある。再利用を前提とする行動が重なるため、永久の排除とは合わない。(113字)

別解例① カードを伏せる目的は見方の変化を試すことだと明記され、配置は最後の一時間に限られた。また、伊織はカードを捨てず予備も保存し、記録には復旧の延期とある。説明を再び使える状態が保たれ、否定して永久に外したという解釈は支持されにくい。(114字)

別解例② 事前に「戻す前に一緒に決めたい」と伝え、実施時間を最後の一時間へ絞っているうえ、閉場時にもカードを保護し予備を残している。説明を再利用できる状態と共同判断の約束が保たれ、記録も復旧延期としているため、永久に外す意図とは読みにくい。(115字)

☆自己採点の観点

- 一時的な提案または共同判断の約束を根拠にしたか。
- カード本体と予備の保存状態を使ったか。
- 反証から言える範囲を越え、最終配置まで決めていないか。

答案で注意したい点 カードが伏せられているという一点だけで、説明文への否定や人物間の対立を作らない。

問三 閉場時の状態を説明する二つの見方 解答・解説

設問の意図 同じ最終状態について、異なる情報源の根拠から二つの説明を組み立てる。

根拠 資料一の来場者継続・復旧延期、本文第八・第九段落の拓の説明とその限界、資料二の共同判断の約束、本文第七段落の保存状態。

根拠のつながり 作業の遅れは時間切れを、共同判断の約束と保存状態は意図的な保留を支える。
言える範囲・決められない点 二つは併存し得る。どちらが主因かは、伊織の最終発言がなく決められない。

答案の組み立て方 「一方」「他方」で二つを対照し、各々に固有の根拠を対応させる。

模範解答

一つは、来場者が続いて復旧を延期し、そのまま閉場時刻になったという説明で、作業記録と拓の説明が支える。もう一つは、二人で戻すか決める約束だったため、戻らない語り手を待つ伊織が配置を保留したという説明で、メッセージとカードの保存状態が支える。

(121字)

別解例①

資料一の「来場者が続いている」「復旧を延期」からは、対応中に戻す時機を逃して閉場したと読める。一方、資料二で復旧前の共同判断を約束し、カードと予備を使える形で残したことから、伊織が語り手を待ち、ひとまずは一人で最終配置を決めず保留したとも読める。(123字)

別解例②

四時半を過ぎても来場者が続き、記録に復旧延期とあるため、対応中に戻す時機を失ったという見方がある。他方、一緒に決めるというメッセージとカードの保存状態から、伊織が戻らない語り手を待ち、ひとまず一人で最終配置を決めず保留したという見方も成り立つ。

(122字)

☆自己採点の観点

- 時間切れを、来場者と復旧延期の記録で支えたか。
- 判断保留を、共同判断の約束と保存状態で支えたか。
- 二つを同じ根拠で支えたり、どちらかを伊織の本心と断定したりしていないか。

答案で注意したい点 二つは併存し得る。来場者への対応と共同判断の延期が同時に働いた可能性もある。

問四 最も支持される結論と残る一点 解答・解説

設問の意図 中心となる結論を選び、二つの根拠と、なお残る一点を一答案へ統合する。

根拠 提案と実施時刻、共同判断の約束、カードと予備の保存、復旧延期。

根拠のつながり 提案と時刻・保存は一時的実験を支えるが、閉場時の理由は二系列ある。

言える範囲・決められない点 一時的な試行であったことは強く言える。閉場まで戻さなかった主な理由は決まらない。二つの理由が同時に働いた可能性もある。

答案の組み立て方 中心となる結論と二根拠を示し、最後に閉場理由の二つの可能性を限定する。

模範解答

伊織は説明を再び使える状態に保ちながら、写真の見方がどう変わるかを試すため、一時的にカードを伏せたと考えるのが最も妥当である。最後の一時間という提案どおり四時に実施し、カードと予備を傷めず保存したからだ。ただし、閉場まで戻さなかった主な理由が来場者への対応か、共同判断の保留かは決められない。(146字)

別解例①

カードを伏せたのは、説明を永久に捨てるためではなく、写真を先に見てもらおう試みだったという解釈が最も強い。事前のメッセージと開始時刻が一致し、カード本体も予備も再利用できる形で残ったからだ。一方、閉場時に戻っていなかった主な理由が時間切れか、語り手待つ判断保留かは、伊織の発言がなく確定できない。(148字)

別解例②

伊織の行動は、説明を復旧できるよう保管したうえで、写真を先に見る時間を一時的に作る試みだったと読める。見方の変化を試すという提案と実施時刻の一致、カードと予備を再利用できる形で残したことが根拠になる。ただし、閉場まで戻さなかった際に来場者への対応と共同判断の保留がどの程度働いたかは決められない。(148字)

☆自己採点の観点

- 中心となる結論を曖昧にせず示したか。
- 提案・時刻・保存状態から二点を根拠にしたか。
- 閉場時の直接理由について二つの可能性を残したか。

答案で注意したい点 複数の可能性を残しても、永久に外すという解釈を中心となる結論にはしない。

全六章を終えて

根拠から推論するときの最終確認 強く言い切れる結論、複数の解釈が成り立つ部分、本文だけでは決められない部分を区別できるか。

- 一 直接の記述 本文にある事実と、自分が補った事情を区別したか。
- 二 根拠の対応 異なる解釈を、同じ一つの根拠だけで支えていないか。
- 三 反証 支持したい解釈と合わない記述を見落としていないか。
- 四 主語 文書として採用された方針を、特定人物の内心へ置き換えていないか。
- 五 仮定 別の行動が起きた可能性と、その結果が必ず変わったという断定を区別したか。
- 六 留保 何も分らないと逃げず、決められない一点だけを具体的に示したか。

よい答案は、想像を多く加えた答案ではありません。本文が支える結論を明確にし、そこから先へ出ない境界も同時に示せる答案です。

利用について

学習者へ まず自分の答案を書き、解答例と語順ではなく、使った根拠・つながり・限定の置き方を比べてください。

指導者へ 別解は、問いへの応答、根拠、説明の整合性から確かめてください。異なる解釈でも、それぞれに十分な根拠があれば認めます。

書き直し 不足する根拠と、強すぎる断定の双方へ印を付け、どこを直したか説明してから書き直してください。

本書の本文・資料・登場人物・団体は、各章の注記に示すとおり、学習のために作成したものです。

奥付

書名 現代文問題集 第六冊 書かれていないことを、根拠から読む

役割 発展・推論の確かさ

発行 和会塾

版 改訂完成版